

Q 4 ADHD (注意欠陥/多動性障害)とはどのような状態ですか

1 ADHDとは

興味のあることには集中できるのに、嫌いなことや苦手なことに対しては取り組もうとしない、周囲の刺激にすぐ反応し、注意がそれやすい、あるいは、おしゃべりがなかなか止まらないという子どもたちがいます。このような様子は、時として多くの子どもに見られることがあります。一時的な状態ではなく、しばしばみられ、状態が続く子どもたちの中にはADHDといわれる子どもがいるかもしれません。

ADHDとは、Attention Deficit/Hyperactivity Disorderの略で、「注意欠陥/多動性障害」と訳されています。

アメリカ精神医学会の「DSM-IV」にある診断名であり、同診断では「不注意」「多動性」「衝動性」の三つの症状が中核となっています。

7歳以前から、その特徴がみられ、社会生活や学校生活を営む上での困難がみられます。

その原因については、十分に解明されていませんが、中枢神経系に何らかの機能不全があるとされています。

24ページ参照



2 ADHDの症状

不注意

注意を十分に払えないため、簡単な間違いが多い。同じ間違いを繰り返すことがみられる。

集中力が持続せず、課題や遊びへの取り組みが続かない。興味のないことには集中できない。

話が聞けず、空想にふけることがある。授業中手遊びが多い。

指示の内容が理解できずに、行動できない。指示を忘れてしまう。

順序よく取り組むことが難しい。

苦手な課題を避けようとする。

教科書やノート等の忘れ物が多い。持ち物をよくなくす。

他からの刺激に惑わされ、気が散る。

注意や集中がうまくできず、目的のある行動がとれないため、先にあげたような症状がみられることがあります。

ADHDの子どもは、不適応な症状として、三つの症状が同時に出現することが多く、「多動性」「衝動性」が目立ちやすいのですが、動きが少ない「不注意」優位のタイプもいるので、注意や気づきが大切です。

多動性

みんなが着席しているところで、席を立ち、歩き回る。

着席していても、身体がたえず、もじもじ、そわそわ動いている。

高いところに登ったり飛び降りたりする。

絶えずしゃべっており、相手や場所を考えないでしゃべる。

本来、子どもは落ち着きがないものです。幼児期には、多くの子どもたちが「多動」の様子を示しますが、「多動」に関しては、単に落ち着きがないとかいうのでなく、発達段階にふさわしくないといったことや、周りの状況に合わせた動きができないといったことが、判断基準のポイントとなります。

適切な支援ができることによって、その多くが、年齢があがるにつれ「多動」が目立たなくなるといわれています。

衝動性

質問が終わるまえに出し抜けに答えてしまう

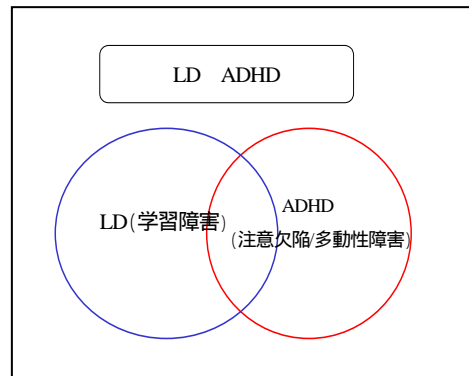
順番が守れない

人の会話や遊びに割り込む等人的邪魔をする

集団生活を送るにあたっては、「ルールが守れない」「我慢ができない」という不適切な行動が目立ってきます。学校や家庭での環境や対応の仕方によっては、改善することも悪化することもあると考えられます。

3 LDとADHDの関係

ADHDは行動発達の面で、LD(Q2参考)は認知発達面での問題であり、両者は同じものではありません。しかし、ADHDの子どもの多くに、学習上の問題があり、知的水準に比べ学力が身に付かないということがみられます。集中力が持続しないため、落ち着いて課題に取り組めないことや話が聞けないということ等も関係しています。そのため、ADHDの半数以上がLDを併せ持つといわれています。



4 問題となる二次障害

ADHDの子どもたちは、幼児期から周りが困るような行動をとるため、強く叱られたり、注意を受けたりすることが度々あります。してはいけない意味や行動を自覚せぬまま叱責されると、反発心が強くなります。また、叱られることやうまくできないことが続くと、自信を失い自己評価を下げるようになります。そして心理面だけでなく、適切な対応がされない場合、非行や不登校、いじめ、家庭内暴力、ひきこもり等二次障害を引き起こすことも時にはみられます。そのため、ADHDの子どもたちの支援に関しては、自尊感情を育て、自信をつけることを主眼におきながら、二次障害を防ぐことが重要となってきます。